

いっぽ いっぽ

～私の子育て体験記 6～

平成 24 年 2 月

高知県立山田養護学校

PTA 広報部

子育てにまつわる苦労や喜びなど、実際の体験や思いを多くの方に知っていただこうと、山田養護学校の保護者の「子育て体験記」第6弾をお届けします。

この体験記が、一人でも多くの皆さんの手助けや子育ての参考になり、仲間との架け橋になることを願っています。



汽車通学で急成長した息子

【はじめに～告知から乳幼児期】

長男のAの障害は、約1000人に1人生まれるとされているダウン症候群です。1997年の2月に、転勤先の東京で生まれました。2,444グラムの未熟児で、心臓にも少し異常がありました。

生まれたのは普通の産院でしたが、黄疸（おうだん）症状があり、体重も増加しないため、生後3日目で近くの大学病院に転院し、集中治療室NICUに入りました。そして私が産院から退院する日、夫とともに大学病院の主治医に呼ばれました。主治医はまだ若い女医で「お子さんの染色体検査をします」と告げられました。

こちらが「検査をするのは数値からですか？それとも見た目からですか」と尋ねると、「見た目です」とのやりとり。ダウン症は目がつり気味で鼻が低く、筋肉が低緊張という特徴があります。それから3週間後に検査結果が出て、主治医から「残念ながら、染色体に異常が見られました。ダウン症です」と告げられました。

息子はダウン症の中でも代表的な、21番目の染色体が通常より1本多く3本ある、21トリソミーでした。その時は、ダウン症という言葉自体、私にとって初めて耳にする言葉でした。その後読んだダウン症に関する本の中に、「ダウン症は天使

の生まれ変わり。だから生まれてくる家を選んでくる」と書かれていました。

でも、子どもは普通に元気に生まれて当たり前と思っていた私にとっては、全然天使ではありませんでした。「どうして私のところへ？何で普通じゃないのか」と泣いて過ごしました。わが子がかわいいか、いとおしいという思いよりも、つらくて悲しくて悔しいという思いばかりが募っていました。

そうした思いから、早期の療育に打ち込んでいましたが、子どもに厳しくあたってしまい、障害のあるなしにかかわらず、ダメなものはダメときつく接していました。筋肉の低緊張から、どうしても咀嚼（そしゃく）がへたで、ミルクを飲むのも時間がかかり、流動食も口から流れ出てしまいます。起きている時間より寝ている時間の方が長く、普通の食事を食べられるようになってからも、食べ物を丸のみしてしまい、よく詰まらせたり吐いたりしていました。

【小学校時代～同級生と関わる】

4年間の保育園生活を経て、自宅からすぐ近く、歩いて3分ほどの小学校に入学しました。地域の子どもたちと一緒に育ってほしい、お友達にもなってほしいとの思いから、通常の学級でスタートし5年生まで籍を置き、6年生の時に特別支援学級に移りました。1、2年の時はほとんど

通常学級で過ごし、3年・4年は通常学級と特別支援学級を行ったり来たりしていました。

2月生まれなので、入学当時は6歳になったばかり。2語文、3語文は話すことができましたが、自分の思いを言葉にすることが難しかったのでしょう。数えきれないほどのトラブルが起きました。体力がないため、疲れがたまりやすく、疲れてくると学校や児童クラブでいたずらをしたり、トラブルを起こします。気を引こうとしていたのでしょうか。周囲に迷惑をかけて、親子でつらい思いをしたこともありました。理解してもらおうと、5年の時には父親が総合学習の時間に障害のことについての講話もさせていただきました。

息子はやさしい子で、近所に住む不登校になった同級生の女の子の家に毎朝迎えに行ったりしていました。別の女の子とも、一緒に遊びに出掛けたり、自宅でパーティーを開いたり、仲良しになりました。また音楽と踊りが大好きで、音楽会や運動会では大活躍してくれました。1年生の運動会で踊った「ひょっこりひょうたん島」のいきいきした踊りは、ビデオのレンズが涙で見えなくなるほど感動しました。4年から6年まで大正琴クラブに所属して校内外で演奏を披露しました。放課後に、ランドセルを砂場に置いたまま、同級生とサッカーボールを追いかけたことも、一生思い出に残る宝物です。

【山田養護学校へ～「なんで」を解消】

中学校の選択については、かねてから寄宿舎のある学校へと決めていました。それで何度か見学や行事参観をした後に、山田養護学校への入学を決めました。

入学したころの息子は、「なんで～?」「どうして～?」が口癖でした。この言葉を連発する息子に、先生方は「なぜ、それがダメなのか」「どうして、そうしなければならないのか」といったことを、毎回丁寧に話してくれました。そして、ある日、気がつく「なんで～?」を口にしなくなりました。

また、作業の時、話もろくに聞かずに行動しようとする息子に、「聞く」、「理解する」、「動く」という一連の流れをしっかりと教えてくれました。国語の授業の書き取りでは、勢い

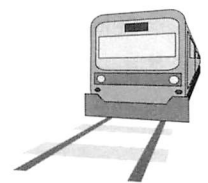
で書こうとする息子に、枠の中に丁寧にきちんと書くことの大切さを指導していただきました。

こうして息子は日々成長していましたが、中学に入ってから「最も成長したな」と感じたことは、何と言っても汽車、つまりJRで通学できるようになったことです。

家庭訪問で担任の先生が自宅にいらっしゃった時、「将来、自分で移動ができるように、A君、汽車で通ってみませんか」と提案があったのです。家から3分ほどの小学校への往復しか、1人で外を歩いたことのない息子に、そんなことができるのだろうか、最初は不安でした。でも、父親が先生と意気投合し「ぜひ、やりましょう」ということになりました。

【汽車通学で急成長!】

汽車通学にむけての事前学習は、それはきめ細かいものでした。学校を出て土佐山田駅に行き、お金を出して切符を買い、列車のどこに乗り、車内ではどのように行動するか、高知駅で降りたらどうするか。こうした一連の行動を細かく分け、息子が理解し行動しやすいよう、絵を使って学習させてくれたのです。例えば運賃は片道350円なのですが、百円玉3個と50円玉1個のコピーをプリントし、切符販売機の前で困らないように指導してくれたのです。



この事前学習をしっかりとした上で、まず金曜日の帰宅から汽車通学にトライし始めました。最初の何回かは、先生と一緒に山田駅まで歩いて行って、列車に乗って下さいましたが、切符を車内に忘れて改札を出ようとしたり、高知駅に着いても寝ていたり、財布の中から切符をうまく取り出せなかったりすることがありました。

その度に先生と話し合っ一つひとつ解決し、金曜日の帰宅は何とか問題なくできるようになりました。そして今度は、月曜日に汽車で登校ができるよう挑戦。今度は私が高知駅から何度か一緒に列車に乗りました。最近では、金曜日に高知駅からの帰り、自宅まで15分ほどを、1人で歩いて帰ることができるようになりました。時々、高知駅まで迎えに行くと、本人は「え～、家まで1人で帰るはずやったのに～」と言うことがあり、こちらは「ごめん、ごめん」と笑って謝りますが、

息子の成長ぶりに胸がいっぱいになります。

2年生になってからは、途中の布師田駅で同級生と合流して、楽しく通学しています。金曜日に帰宅する時は大体、汽車で帰ってきていますが、月曜日に登校する際は、通学バスに乗って学校に行くことも時々あり、汽車通学が万全というわけではないのですが、息子の成長ぶりはやはり感じられます。

これも、きめ細かい指導計画を立てて丁寧に教えてくださった先生方と、仲良くしてくれる同級生のおかげだと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。山田養護学校は入学以前に思っていた以上に、いろいろな生徒さんが在籍しており、息子も大いに刺激を受けて成長しています。

【充実した寄宿舎生活】

小学5年生の合宿研修、6年の時の修学旅行以外は親元から離れたことがなかった息子を、寄宿舎へ入れることは、母親として大変勇気がいることでした。でも、先輩のお母さんたちから、「寄宿舎に入れてよかったと思う」というお話を多く聞いていたので、思い切って寄宿舎でお世話になることにしました。

そんな親の心配をよそに、息子は寄宿舎生活にすぐ慣れてしまい、夏休みに家に帰ってきた時は1日、2日で「寄宿舎に帰りたい」という始末です。というのも、寄宿舎は、四季折々に開く行事や誕生会など、楽しいイベントが満載だからです。

昨年、クリスマス会に参加させていただく機会がありました。各ホームごとに出し物があって、息子は高校生のお兄さんたちに誘われて、バンドのメンバーになり、嬉々としてエア演奏を披露していました。さまざまな行事の準備などをしてくださる先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。

また、寄宿舎には学校とは別に、「個別の生活支援計画」があります。身の回りのことだけでなく、さまざまな生きる力の指導をしてくれます。それこそ、自由時間にテレビの前から動かない息子を、散歩や庭に連れ出していただいたり、きめ細かく指導していただいております。

ぜひ、機会があれば見学してみてください。



【最後に～頼もしくなった息子】

現在、息子は小学校時代のようなトラブルもなくなり、日曜日はジャズダンス教室に通い、長期の休みにはスイミングをしたり、よさこい祭りで踊ったりしています。また、学校で習ったコンソメスープを作ってくれたり、洗濯物を取り込んでたたんだり、下の小6の娘よりも積極的に家事を手伝ってくれます。スーパーに買い物に行くと、私の荷物を持ってくれたり、実に頼もしい存在です。

細かくみれば、社会性や体力面、言語の発達、発音、咀嚼のこと、また、いたずらなど、まだまだ課題は尽きませんが、これからも山田養護学校の先生方や上級生、下級生そして同級のお友達など、たくさんの人の力を借りながら成長し、世の中の役に立つ人間になってもらいたいと思います。

「10年間でふりかえって ～いっぽいっぽのあゆみ～」

現在小学部4年生の娘には重度知的障害を伴う自閉症、先天性心疾患（ファロー四徴症、肺動脈離断）、22q11.2欠失症候群の障害があります。

【生まれた時】

10年前の8月、娘は予定より2ヶ月早く産まれました。私自身は、仕事の産休まであと1ヶ月となり、出産を心待ちにしながらも、かわらず日々の生活を送っていたさなかでした。娘は1660gの未熟児で、いわゆる胎児仮死の状態でした。挿管され、高知大学（医）のNICUへ。心臓病、染色体異常があり、心臓は手術をしなければならないと告げられました。それから約2年間の入院生活が続き、病気との闘いの日々が始まりました。

保育器の中の娘の姿は痛々しく、涙がでました。チアノーゼがひどく、血中の酸素が低下する度に、顔色がますます悪くなる娘を見て不安でいっぱいでした。とにかくしっかりしなければいけないと自分にいいかかせていました。

NICUで3ヶ月たったころ、娘のチアノーゼはさらにひどくなり、緊急手術のため、大阪の国立循環器病センターに転院しました。1回目の心臓オペ後も、横隔神経麻痺による呼吸困難のため手

術をするなどの入院治療を続け、1歳2ヶ月で、2回目の心臓手術をしました。12時間の大手術を、本当に頑張って乗り越えてくれました。手術は成功したのですが、術後なかなか状態が落ち着かず、ICUから1ヶ月間でられませんでした。体重も5キロを切り、1歳を過ぎた子どもとは思えないほど痩せていました。出産後、ずっと気持ちをはりつめてきましたが、娘に、とてつもなく苦しい思いをさせてしまっている自分を責める気持ちや、何もしてやれない無力感でいっぱいでした。でもひたすら耐えて頑張ってくれている娘の姿に逆に支えられました。何とか乗り越えて元気になってほしい、ただそれだけでした。

重い病気を抱えて頑張るたくさん子どもさんたちや、お母さん方と出会い、命を助けていただき、命と向き合った病院での約2年間は、娘の母親になるまでは考えもしなかった、大切なことに気づかされ、教えられた日々でした。娘は本当に頑張ってくれました。ようやく高知へ帰れる日がきました。24時間の在宅酸素をしながら、待ちに待った家庭での生活が始まりました。

【家庭生活】

ベッドの上でなく、床で生活することで足腰は丈夫になってきました。3歳で歩けるようになり、とてもうれしかったです。音楽が聞こえると体を左右にふったり、可愛い姿をたくさん見せてくれるようになりました。

でも退院し、普通の生活ができるようになり、あれっ？と思うことがだんだん出てくるようになりました。娘は新しい環境になかなか対応できないようでした。落ち着かず、機嫌の悪い日が続き、まず家での生活に慣れるのにとっても時間がかかりました。名前を呼んでも反応しない、目が合わない、好きな遊びはグラニュー糖の入った小さな袋をふることだけ、新しいおもちゃもはじめての場所もとても苦手、私がいてもいなくてもあまり関係ないみたい…また、夜ぐっすり眠れていないようで気になっていたのですが、そのうち本当に眠らなくなりました。夜中に突然目を覚まし何時間も起きています。頭をひたすら左右にふって声を上げ、明け方寝る。これが5歳まで体調が悪いとき以

外は、ほぼ毎日のように続いていました。体が弱いのに、夜は寝ないの悪循環で、ちょっとした風邪からすぐ重い肺炎を起こし入院してしまうことを、しょっちゅう繰り返していました。どんなに気をつけてもこの悪循環を、どうすることもできませんでした。この頃の入院は赤ちゃん時代とは違った面で大変でした。呼吸が苦しくてぐったりしているうえに、入院の度に、状況が全く理解できず、病院での嫌な経験ばかりがクローズアップされてパニックになる娘に、ただオロオロするばかりでした。他の小さいお子さんたちが同じ状況で泣いているのとは全くちがう…。

体の面では、年齢とともに少しずつ体力もつきはじめ、いつ取れるかわからないといわれていた酸素がいなくなりました。これは本当に何よりうれしいことでした。でも時間がたつにつれて、子どもが体の病気、心身の発達の遅れのほかにいろいろな困難をかかえているということが、はっきりとみえてきました。

【幼稚園入園】

3歳から高知市にある障害児通園施設ひまわり園に親子通園をはじめました。1歩外へ出たことで、世界はずいぶん広が



りました。子育てで孤独を感じることが多くなってきたころでしたので、他のお母さん方と気持ちを共有できる場所ができたこともとても救いでした。

5歳までずっと娘につきっきりでした。心配でしたが、できれば就学前の1年は私から離れ、集団生活を経験させてみたいと思いました。お友達のお母さんが教えてくれた幼稚園を訪ねお願いしたところ、理解をしてくださり、加配の先生をつけて娘を受け入れてくれることになりました。娘は幼稚園が大好きでした。パンのおもちゃ、砂場、ぶらんこ…本人の好きなことが驚くほどふえました。優しいお友達との関わりもたくさん作っていただき、本当にかげがえのない1年でした。

一方、集団生活の中で、娘のいろいろな面がわかってきました。行事でいつもの幼稚園の様子がかわってしまうと、娘はとてもつらくなって泣いていました。また、表面上はその場でなんとなく居ることは出来ていても、実はとてもストレスを

感じていて、あとで大きく反動が出てしまうこともありました。イヤという気持ちが表に出せず、無意識にがんばってしまう…衝撃でした。

【自閉症】

自閉症の診断が出たのは4歳でした。自閉症の診断より先に、重度の知的障害とは判定されていましたが、当時、私は自閉症についてきちんと理解していませんでしたし、また新たな障害の告知はショックでした。でもこれが転機でした。年長で幼稚園に入園したのと同時に療育センターの自閉症児通園「える」に、一年間通いました。娘のことをいろいろ相談させてもらううちに、子どもとの生活の中であれっ？と感じていたことが、この障害とはっきり結び付いていきました。何が娘の混乱や、しんどさの原因になっているのかということちゃんとわかってやるのが、まず大事なのだということを思いました。私が気にならないようなことに、とても過敏です。いつもと何か違うと不安になります。言葉がいっぱい聞こえても何をいわれているかわからないし、どうしたらいいかわからない、そのうえ自分の気持ちを伝えることができなければどんなにしんどいことでしょう。

「える」では、見通しがもてるよう、活動の流れや変化を、本人に理解できる形（実物、写真、絵）で視覚的に伝える“スケジュール”、活動と場所を1対1で一致させ、ここでは何をするのか、わかりやすく環境を整える“構造化”、写真やカードを相手に渡し、自分の要求を伝えることから訓練する機能的コミュニケーション“PECS”などを具体的に体験することができました。全てが解決するわけではありません。でもその考え方、取り組みは、娘にとって、何より“わかりやすい”ということにつながり、生活の中で取り入れたら、きっと娘の困難を和らげる手助けになると感じました。通園をきっかけに、日々の生活の中で娘が見通しをもてるよう、その日の行き先や次の活動を、実物や写真を使い、本人が分かる形で伝えるようにしてきました。また娘の状態に合わせて家の環境を工夫しました。ちょっと工夫するだけで随分違うこともありました。一つの例が着替えです。娘はとにかく周りが気になる子です。集中することが難しく、服を見ないので、毎日繰り返しても、着替えが全く身に付かない状態でした。な

ので、着替える場所を決め、気が散らないようにダンボールで仕切ったところ、それだけで手元を見れるようになりました。

幼稚園でも、娘が落ち着いて過ごせるように、刺激の少ない場所に席を作ったり、荷物の置き場を分かりやすくする等、色々な配慮をしていただきました。アッというまに卒園の 때가…卒園式は行事の中でも一番意味がわかりにくく、本人がしんどいでしょうし、騒いで他のお子さんに迷惑をかける心配もあり、出席することは気がすすみませんでした。が、先生とよく相談して、ただずっとその場にいることを求めるのではなく、本人が何をするのか（卒園式=紙をもらう）わかって参加することだけを目標にしました。一番に名前を呼んでもらい、証書をもらったらすぐ退席、後半の歌のところで再入場し、みんなと一緒に送ってもらう。練習の時から関連物や写真を使い、娘に伝えながら参加しました。当日はハラハラドキドキしましたが、娘にあまり無理がいかず、思い出に残る本当にいい卒園式になりました。

【コミュニケーション 学校生活】

娘には現在も全く言葉がありません。療育に出会うまで、娘の要求行動はすべてクレーン（人の手を取り、取ってほしい物の方向に動かす）で、小さい頃からごく自然にやっていました。私はいつも娘と一緒にいるので、これをとってほしいのかな、こうしてほしいのかなと大体はわかりました。でも娘が、一体何をしてほしいのかわからないこともとしょっちゅうで、誰にでもは、本人の思いがきちんと伝わらないのではと感じていました。そんなとき、療育先の先生が、前述のPECSを教えてくださいました。写真や絵、文字を使って表されたカードなら、カードを渡した相手に自分の思いを具体的に伝えられます。感覚的な遊びが好きな娘は、布の上ののって揺らしてもらうシートブランコが大好きでした。「える」では、その遊びを「好子」とし、カードを使って要求を伝える練習をはじめました。シートブランコを表すカードは、乗せてもらうキルティングの布地そのものを、小さく切って作ってくれました。当時、実物と写真のマッチングができなかった娘ですが、これなら手触り



も実物と一緒になので、布地カード＝シーツブランコと覚えやすく、先生や私に「ブランコやってください」とカードをもってくることができるようになりました。工夫次第でうちの子にもわかるんだなあ、伝えられるんだなあ、うれしくなりました。同時に家庭でも、子どもの好きなおやつやお気に入りのグッズのカードを、本人の理解出来る形で作り、練習を始めました。いちどできたからすぐに意味がわかる子どもではありません。でも、5年間ずっと続けてきて、私だけでなくいろいろな人に、離れたところにおいても自分からカードを渡して伝えていくことができるようになってきました。療育先、家庭だけでなく、学校のクラス担任の先生にご理解をいただいて、本人が過ごすいろいろな場所でやってこれたことで、自分から伝えていく力が身についてきたのかなあとと思います。自分一人でできないとき、何か困った時に、カードで「手伝って」も伝えられるようになってきています。

今、学校の教室に、娘の要求カードを貼ったブックと、娘用の1日の流れを写真で示したスケジュールをおいてくださっています。教室外での活動、行事の時にも常に自分で携帯することが理想なのですが、今の時点で娘には難しいです。なので、そういった場合、必ず担任の先生がスケジュールやカードを持って行って、娘に伝えてくれています。見通しがもてることで、本人の安心につながっていますし、そのカードが娘からの発信につながることもあります。本人の理解と安心のために欠かせない物です。

周りが気になりすぎて、落ち着かなくなったり、気持ちが切り替わるのに時間がかかり、次の行動に移りづらいこともよくある娘ですが、担任の先生方は、何より本人のペースを大事にして、温かく見守り、子どもの気持ちが向くのを待ってくださいますし、娘が娘の方法で伝えられたことを大事にして支援していただいて、本当にありがたいと思っています。

カードを渡す、この一見無機質に見える行動の中に、娘の思いが詰まっています。そのやり取りの中で、たま～にですが、自然に目線が合うこともあったりと、娘がまるで話しかけてくれているような雰囲気、最近特に感じるこ

とが多くなりました。本人の“伝えたい”という気持ちがとても育ってきている感じがしています。

でも娘の気持ちをすべてわかることはむずかしいです…。何が娘の中で起こっているのか、きっと原因があるはずですが、わかってやれないことも多いです。ムリをさせない、休まる環境を作る、見通しがもてるようにする等、周りがコントロールしてやる必要があると思います。自分のしんどさや気持ちを伝えるということは、とてもむずかしいことです。気持ち的にしんどいことが周りにわかりづらい時もあるので、体の不調、休みたい、ちょっとその場から離れたいたいといった気持ちを、娘が分かる形にして自分から伝えられるよう考えていくことが、これからもずっと課題だと思っています。

【これから・・・】

気がつけばあっという間の10年でした。娘の小さな小さな歩みが、本当に私たち家族に大きな喜びをあたえてくれました。昔は乏しかった表情も本当に豊かになり、いろいろなことが楽しめるようになってきました。何より病気を抱えていることを、ふっと忘れてしまいそうになるほど元気に過ごしています。でも本質的な部分は、よくも悪くもあまり変わらないことがほとんどなのかもしれません。大きくなるにつれて、また新たな壁も出てくるのであろうとは思っています。



自分の力ではどうしようもないことが、障害のある人にはあります。一人ひとり課題も違うし、将来像もそれぞれです。でも表に見えない部分で困難を抱えていることも多いと思います。その人その人に合った周りの理解、配慮が本当に助けになります。家庭、学校、関係機関がよく情報交換し、本人の内面的なところまでしっかり向き合い共有し、ともに考え支援していく中で、子どもたちは安定し成長していけるのだと思います。

障害が重く、これからもずっと周りの方々に常に見守り助けていただかなければならない娘ではあります。そうであっても、本人にあったちょっとした工夫や手だてによって、自分でわかってできるという部分を大事にしたいと思っています。すぐ目に見えるものではないですが、積み重ねていく

ことで、娘なりに「わかった!」「できた!」「伝わった!」という小さな喜びをたくさん感じられる人生であってほしいと願っています。そのために、これからも、これまでの支援を、娘の成長に合わせた形にしながら、ずっと続けていくことが大切だと思っています。

学校に入って、日々、子どもさんに向き合っているいろんな気持ちを抱えながら一生懸命に子育てしているたくさんの保護者の皆さんと出会えました。子どもさんはみんなそれぞれで、でも言葉に

はなくても、わかりあえる土壌がある気がします。一緒に愚痴ったり笑ったり、自分のことのようになり、心配してくれたり…心強く感じます。

娘を育てる中で、本当にいろいろな方々にお世話になり、力を貸していただいているということ、改めて感じています。娘にどんな未来が待っているのか…。でも娘のことを理解していただける輪を、少しでも広げていけるよう、娘とともにいっぱいあゆんでいきたいと思っています。

『成年後見制度』とは

最近、新聞やニュースの記事にも取り上げられたことがあるので、この『成年後見制度』という言葉を目にされたり耳にされたりする方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

ここでは、この制度について、高知市障がい福祉課から簡単に説明していただくことにしました。

成年後見制度とは、「認知症、知的障害、精神障害などによって判断する能力が十分でない方(以下「本人」)に対し、本人の権利を守る援助者を選ぶことで本人を法律的に支援する制度」です。

この成年後見制度は「任意後見」と「法定後見」と2つの制度に分かれており、「任意後見」とは、あらかじめ「誰にそのような支援をしてもらうか」ということを契約により決めておくものです。「法定後見」は次の表のように、さらに3つの類型(種類)に分かれます。

後見	判断能力を欠く常況にある方 (※療育手帳のA1、A2レベル相当の方)
保佐	判断能力が著しく不十分な方 (※療育手帳のB1、B2レベル相当の方)
補助	判断能力が不十分な方 (※療育手帳のB1、B2レベル相当の方)

つまり本人の判断能力に応じ利用する類型が変わってくる、ということになります。この制度を受ける方は「被後見人」「被保佐人」「被補助人」と呼ばれ、また援助者については「成年後見人」「保佐人」「補助人」と、類型によって呼び方が変わってきます。



○ 事例【前半】

A君は、お母さんと二人暮らしです。A君には生まれつき重い知的障害がありました。ところが、お母さんが重い病気で倒れ、すぐに病気がよくなるといった状況ではなかったため、A君を支援する人たちと検討した結果、A君は施設に入所することになりました。

そこで、A君の今後の生活を守るため、お母さんはこれまで自分が行ってきたことを別の人(第三者)に委ねるために、「成年後見制度」を利用することになりました。

○ 成年後見制度を利用するためには、家庭

裁判所に申請(これを「申立て」と言います)を行います。申立ては本人、配偶者、4親等以内の親族(いとこ、甥姪まで)が、また身寄りがいないといった理由の方の場合、市町村長が行います。

申立てには申立書、診断書、印紙代や公正証書作成の手数料といった費用が必要になります。それらを揃え家庭裁判所に申立てを行い、裁判所の審問や調査等を経て成年後見人が選任されます。そして、この成年後見人が、本人の財産管理や契約など、法律行為を行うことになります。申立て時には、「誰が成年後見人になるのか」といった成年後見人の候

補者を記載することもできますが、裁判所がその方を「不適」と判断すれば、別の方（弁護士や司法書士、社会福祉士等の第三者）が成年後見人として選任されることもあります。

これら成年後見制度に関する相談は、社会福祉協議会や「リーガルサポート高知」「ぱあとなあ高知」といった成年後見支援センターで行っています。



○ 成年後見人等の主な仕事は、本人に代わって財産管理すること〔財産管理〕、本人の身上に配慮して様々な事務を行うこと〔身上監護〕です。ただし、事実行為（家事の代行や実際の介護）は成年後見人等の職務にあたりません。また、本人がある医療行為を受けることを決める（医療的同意をする）権限はありません。その他、成年後見制度を利用すると、会社の取締役とか医者といった、一定の資格を持つ仕事に就くことができない（“成年後見”“保佐”の場合）といったことや、選挙権を失う（“成年後見”の場合）といった制限も発生します。

成年後見人への報酬額は原則として、家庭裁判所が決めることになっていて、その額は本人の財産状況から勘案して支払いできる範囲で決定されます。

○ 事 例 【後半】

家庭裁判所の審理を経て、A君は成年後見制度を利用することになりました。この時、A君にとって必要な支援は、今後どのような施設で生活することが良いのか、といった身上監護の面にあったことから、A君の成年後見人には社会福祉士が選任されました。

この制度を利用することができるようになったので、A君の将来に対するお母さんの不安もずいぶん解消されたようです。



○ 成年後見人の任期は、本人の判断能力が回復、若しくは本人が亡くなるまで、となっています。つまりこの成年後見制度は、『本人に代わり、その方の生活を管理・援助していく』というとても大切な制度です。

“本人にどのような支援が必要か”というその時の状況を周囲の皆で理解すること。そしてその支援の一環としてこのような制度があり、必要に応じて活用していくことが大切である、ということをお母さんに知っておいていただければ、と思います。



〔出典：高知市障がい福祉課〕

山田養護学校では…

障害のある子どもの『教育相談』を行っています。

「家庭での生活習慣や身辺自立について、どうすればいいのか」
「どんな教育を受けさせたらいいのか」など、子どもの養育や教育についてご相談に応じます。

ご希望の方は、下記までご連絡ください。

〒782-0016

香美市土佐山田町山田 1361

TEL 0887-52-2195

高知県立山田養護学校 教育相談部

FAX 0887-52-0031

これまでの子育て体験記もございます。ご希望の方は、広報部までご連絡ください。